川の流れのように

安井 朱美

十年ほど前に出版された『日本人の知らない日本語』という漫画をご存知だろうか。日本語学校で日本語を教える凪子先生と外国人学生たちとのコミカルなやり取りが基になっているものである。タイトル通り、外国人の視点から見た日本語や日本文化は日本人にとっても新鮮な気づきだとベストセラーとなり、四巻まで続いた大人気作品である。

初めてこの漫画を読んだ時の私の感想は、「ある、ある！」であった。凪子先生同様、私は留学生に日本語を教えている。だから、日本語が母語ではない留学生からされる質問も、異文化だからこそ起こる誤解や問題、そして楽しさも、私にとっては馴染みのある「日常」である。程度の差こそあれ、漫画の中にしか存在しない別世界では決してなかったのである。

「どうして日本語教師になったのか」と留学生からだけでなく、日本人学生からもよく聞かれる。漫画のネタにありそうな話で恐縮だが、答えは「アメリカ人の日本語学習者に助詞の『は』と『が』の違いを聞かれても全くわからなかったから」だ。

当時、私はアメリカでビジネスを学ぶ学生で、ある日ひょんなことから日本語の授業にボランティアとして参加することになった。それまで周囲に日本語を話すアメリカ人はほぼ皆無だったため、いったいどんなことを日本語で話すのだろうか、友達になれるだろうかと前夜は期待に胸を弾ませていた。

ところがその翌日、私の淡い期待はあっけなく裏切られた。簡単な自己紹介を終えるや否や、相手の口から出てきたのは「助詞の『は』と『が』は、何が違いますか」だったのである。あまりにも想定外すぎる質問で、それまで一度もそんなことを考えたことがなかった私の頭は完全な思考停止状態になった。でも何か言わなきゃ、とやっとの思いで絞り出したのが「えっと、自己紹介のときは『は』で、強調したいときは『が』かな」と説明にもなっていない説明。

すると、相手は間髪入れず「じゃあ、どんな時に強調しますか」と次の直球質問。思わず手元にあったペンを取り、「これはペンです」「これがペンです」と意味不明な文を繰り返しながら、必死に「正解」に思えそうな答えを探す。が、健闘むなしく「？？？」の深い闇が静かに私の前に広がっていった。

「日本人なのに、こんな簡単なことも説明できないの？」という心の声が聞こえてきそうな相手のあきれた顔を前に「日本語は難しいですよね」と曖昧な笑みを浮かべ会話を無理やり終わらせた私……。

穴があったら入りたい失敗例は枚挙に暇がないが、その時まだ二十歳そこそこだった私には一生忘れることができないほどの衝撃的な大事件

であった。

そして、同時にそれはその後の人生を大きく変えるきっかけともなったのである。

◇

日本語の習得を目的として外国人を対象に日本語を教える日本語教育機関は、大別すると「日本語学校」と私立大学・短期大学に設置されている「留学生別科」がある。前者は後者に比べると、圧倒的にその数も在籍者数も多い。一方、日本に現在七十あまり設置されている別科では日本語や日本文化、日本事情、大学進学のための基礎科目等を学ぶことができ、受入形態の違いによって日本の大学等への進学を目的とする「予備教育型」、留学そのものが主目的の「スタディ・アブロード型」、そしてこれら二つの「融合型」にわけられる。

名古屋外国語大学の国際日本語教育インスティテュートは「スタディ・アブロード型」であり、様々な国から集まる留学生達は全員が交換留学生で留学期間は短くて半年、最長でも1年。その間に集中して日本語を学んだり、英語で日本文化や日本事情を学んだりしている。そのため、留学生に日本語を教えている私はほぼ毎学期必然的に新しい留学生との出会いと別れがある。この点も学部の授業との違いだが、その他にも日本語の授業では他の教員とのチームティーチングが多いことや、日本語力によってレベル分けされたクラスを担任制に近い形で担当し、その授業時間数が多い点も挙げられる。

これまで数えきれないほど本当に多くの国々から来日した留学生との出会いがあり、どの学期、どのクラスにもそれぞれ忘れられない思い出がある。

しかし、一番記憶に残っているクラスと言えば、やはり数年前に前任校で担当したクラスだ。詳細な理由は後述するが、そのうちの一つが圧倒的な授業時間数にあった。週に八コマ（一コマ＝九十分）日本語を集中的に学ぶコースで、上級レベルで学生数が少なかったこともあり、チームティーチングではなく、私一人でそのクラスを担当することになったのだ。つまり、週に八コマ＝十二時間、十五週ある一学期間では合計百八十時間にものぼる長い時間を同じ留学生相手に過ごしたわけである。

その濃厚な時間に負けない、「超」が最初に三つほどつきそうなぐらい個性的な留学生八名がその上級クラスにはいた。一般的に言って、上級レベルには漢字圏の日本語学習者が多い。だが、予想に反し、アメリカ人学生が四名、スウェーデン、西アフリカのブルキナファソ出身がそれぞれ一名ずつと非漢字圏の留学生が大半を占めていた。そのため残りの二人である、中国と韓国の学生はどことなく肩身が狭そうにしていた珍しい構成のクラスであった。

まず驚かされたのは、その八名が日本語の勉強を始めた理由や将来の夢が私の予想とは大きくかけ離れていたことである。初中級レベルの学生がよく理由として挙げる「日本のマンガやアニメが好き」というようなわかりやすいものではなかったのだ。例えば、「日本語で小説を書くアメリカ人作家としてデビューしたい」、「『日本人より日本文化や日本語に詳しい』と言われるのが何よりうれしいから」や「四歳の時、日本人は他の国の文化を取り入れられる優れた能力を持っていることに気づき、そんなCOOLな日本人になりたいと思ったから」というような変化球である。また、これまで日本語学習はすべて独学で、かつ留学前に常用漢字は全部マスター済みのため「常用『外』漢字をできるだけ多く覚えたい」と抱負を述べた学生もいた。最初の授業でこれらの言葉を聞いて、だからこそ彼らは上級レベルまで到達したのだなと妙に納得したのを覚えている。

授業開始からまだ数日しか経っていなかったある日のことである。課題提出が遅れた学生にシラバスの記載通り減点すると告げたところ、不満げな表情を浮かべた彼から返ってきた言葉が「カンジュいたします」だっ

た。その瞬間、私の頭の中は「？？？」で埋め尽くされた。数秒の静寂をはさみ、「カンジュ？」と彼が使った言葉を私はそのまま繰り返した。その私に彼は冷ややかな目を向けて言った。「甘んじて受け入れる、という意味です」。……もちろん意味がわからず、聞き返したのではない。日本語を学ぶために初めて日本に留学した学生から、あのタイミング、あの文脈で至極自然にさらっと「カンジュ」という言葉が出てくるとは思いもしなかったからだ。もっと正直に言うと、そもそも私の中では「わかりました」以外の返答は端から想定外であったのだと思う。

こうして前途多難な学期が始まり、まず、彼らにとってどんな授業が適当かというスタート地点から途方に暮れた。前任校の別科も「スタディ・アブロード型」であったため、基本的に彼らには日本の大学や大学院への進学希望はない。そのため、「アカデミック・ジャパニーズ」と呼ばれるものを扱う必要性は低かった。また、上級レベルともなると日本語母語話者が日常的に見聞きする生教材が主となる。ただ、上級レベルとはいえ、八名の日本語力の差はかなり大きく、興味の対象もばらばらで知識にも偏りがあった。同時に、各自の性格や学習スタイルを考えても、グループワークには向いていないように感じた。散々悩んだ末、私が選んだ授業活動の一つは、主体的な学びができるプレゼンテーションを主とするものであった。

その土台になるものとして選んだのは、生教材ではなく、『ＴＨＥ ＧＲＥＡＴ ＪＡＰＡＮＥＳＥ 三〇の物語』（くろしお出版）という中上級レベルの読解教材であった。「著名な日本人三十人のストーリーを通して、日本文化や社会問題、考え方や価値観を学び、知的好奇心を刺激しながら読解力を高め」「読み応えのあるストーリーで異文化理解を深めるだけでなく、学習者が自身について振り返り、考える機会をもつ」というその教材は個性豊かな彼らの潜在的なニーズにも合うのではないかと考えたからだ。そして、その三十人の中から調べたいと思う人物を二人ずつ選びプレゼンするよう指示した。

日本語や日本文化に強い関心があり、これまで勉強を続けてきた彼らである。だから、映画好きなら黒澤明、宮崎駿、歴史好きなら織田信長、文学好きなら紫式部、夏目漱石、村上春樹、スポーツ好きならイチロー、というように世界的にも知られている人物を当然選ぶだろうと思っていた。が、「日本では著名なのに、自分は知らないことが許せない」という理由で、実際に彼らが選んだのは、卑弥呼、杉原千畝、俵万智、萱野茂、孫正義、秋元康、山中伸弥、三遊亭圓朝、石黒浩などだったのである。

私が発表に求めたのは大別して二点。第一に、その人物が「どんなことをした人で、なぜ有名なのか」を、その人物について全く知らない人にもよくわかるように説明すること。そして第二に、「読解教材の本文に書かれていない内容も必ず含める」ことである。人物に関連する日本文化や社会問題なども深く学べて新しい知識も得られるよう、具体的には、雑誌や新聞記事を読んだり、ドキュメンタリーやインタビュー番組などを視聴したりすることを推奨した。つまり、ある特定の分野で著名なある人物の「小さな専門家」に各自がなることを期待したのである。

結果的には、プレゼンの多くが私の期待の遥か上をいくものとなった。例えば、落語家の三遊亭圓朝の発表では、まず落語とはどういうものかという説明から始まる。そして、寄席、高座、流派の説明に続き、扇子、手拭いは実物を見せつつ紹介。その後、圓朝の代表作ともいえる『死神』のあらすじを声色を変えながら面白おかしく説明した後、ＹｏｕＴｕｂｅで視聴。最後は「おあとがよろしいようで」で締めくくる。プレゼンのお手本とはこのようなものを指すのだろうと認めざるを得なかった。

さらに、この発表直後の「おまけ」にも驚かされた。圓朝の発表者とは別のアメリカ人学生が「この機会に落語を皆の前で見せたい」と申し出たのだ。聞けば彼は落語研究会に所属しており、先輩に最初に「暗記させられた」のが古典落語で有名な「つる」だったという。早速、彼は教室の机を高座に見立て「座布団がないけど」と言いつつ、十分強の長さの落語を見事に披露してくれた。あまりにも堂々とした姿と自然な日本

語に彼が日本人ではないということを忘れそうになってしまった。

◇

しかし、全プレゼンの中で最も印象に残っているのは、ブルキナファソ出身の学生が紹介した「秋元康」編だ。

その読み物のタイトルは『成功する秘訣』。冒頭の一文は「ＡＫＢ48は日本の女性アイドルグループだが、ＡＫＢ48のプロデューサー、つまり生みの親にあたるのが秋元康だ」から始まる。放送作家、作詞家、プロデューサーと様々な分野で活躍している秋元氏の「成功の秘訣」をインタビューでの彼の言葉や例え話から探ろうとしているもので、筆者の最終的な見解は、その秘訣とは「人と違うことをすること、そして周りが何をしているのかではなく、自分自身の行動に自信を持つことではないか」である。

この読み物から、マルチな才能を持つ秋元康本人と、平成を代表するアイドルグループであり留学生にも知名度が高かったＡＫＢ48との秘話を紹介したり、秋元氏の不思議な例え話について掘り下げたりするような発表になるのだろうと思っていた。

ところが、実際の発表は、他のクラスメートの発表とは明らかに一線を画すものであった。そして、その時、私が見た彼は信じられないほど自信に満ちあふれていた。……なんと、その理由は、昭和を彩ったあの国民的歌手、美空ひばりの『川の流れのように』にあったのだ。

もちろん読み物に美空ひばりは出てこない。なぜＡＫＢ48の代表曲である『恋するフォーチュンクッキー』でも『ヘビーローテーション』でもなかったのかは疑問だが、とにかく秋元氏について調べているうちに彼が行きついたのは、『川の流れのように』であった。秋元氏が作詞を手掛けている数多くの曲の中から運命的な出会いを果たし、歌詞の世界観にどっぷりはまってしまったという。当然、発表では秋元氏本人の紹介よりも、美空ひばり、正確に言えば『川の流れのように』の歌詞についての熱い解説に多くの時間が割かれた。そして、最後には「さぁ、皆さん。一緒に歌いましょう」と呼びかけて、私だけでなくクラスメート全員を唖然とさせた。

発表が終わった時には、もはやどこにも秋元康は存在していなかった。唯一残ったのは「日本には、こんなすばらしい歌詞がある」と彼が絶賛していた歌詞だけ。それが私の頭の中をぐるぐると回っていた。

『川の流れのように』（作詞：秋元康　作曲：見岳章）

知らず知らず　歩いて来た　細く長い　この道
振り返れば　遥か遠く　故郷が見える
でこぼこ道や　曲がりくねった道　地図さえない　それもまた人生
ああ　川の流れのように　ゆるやかに　いくつも　時代は　過ぎて
ああ　川の流れのように　とめどなく　空が　黄昏に　染まるだけ
生きることは　旅すること　終わりのない　この道
愛する人　そばに連れて　夢　探しながら
雨に降られて　ぬかるんだ道でも　いつかは　また　晴れる日が
来るから
ああ　川の流れのように　おだやかに　この身を　まかせていたい
（後略）

改めて口ずさんでみると、彼が言う通り、心に沁みるいい歌詞だなと思う。と同時に、ブルキナファソという遠い国から、神の導きで日本に来たという彼のこれまでの人生と重なる部分を感じ、彼がこの歌詞に魅了された理由が少しわかるような気もした。

「型破り」という一言では到底片づけられない発表であった。が、数年経った今もまだ、私の脳裏に強烈に焼き付いたまま全く色褪せていない。

この点で、秋元氏の『成功する秘訣』そのものを発表の形で体現できた成功例と言えるのだろう。その「秘訣」は、やはり「人と違うことをすること、自分自身の行動に自信を持つこと」にあったようだ。

いつの日かアフリカ大陸で『川の流れのように』が流行る日が来るのかもしれない。

◇

このエッセイのテーマは「教師と学生を結ぶ」というものであるが、私にとって「教師と学生を結ぶところ」は教室であり、教室の中に広がっている世界である。そして、それらを「結ぶもの」は、日本語にある。日本語母語話者だからこそ、日本語を客観的に見るのは難しいのだが、知れば知るほど奥深く面白いものでもある。

日本語学者の野田尚史氏は助詞の「は」と「が」の使い分け方法を五つに分類している。その五つとは、新情報か旧情報か、現象文か判断文か、指定文か措定文か、主格が対比の意味か排他の意味か、主格がどこまで係るか、である。

例えば、童話の『桃太郎』は、日本語母語話者なら誰でも知っているように「昔々あるところに、おじいさんとおばあさん『が』いました」から始まる。ここで『が』が使われている理由は、「おじいさんとおばあさん」が読み手にとっては「新しい情報」で、主格となる名詞、つまり「おじいさんとおばあさん」が前にありマークされるからである。続く一文は「おじいさん『は』山へ芝刈りに、おばあさん『は』川へ洗濯に行きました」であるが、すでに前文で「おじいさんとおばあさん」は登場しており、読み手にとっては既知の「旧情報」。「新情報」は、そのおじいさんとおばあさんが「山や川に行ったこと」で、主格の名詞の後ろにあるので、『は』が使われるというわけである。また、この場合「犬『は』好きだが、猫『は』嫌い」のように「対比」の『は』でも説明できる。

外から日本や日本語を見る日本語教師の仕事は多岐にわたる。『は』と『が』の違いなど、日本語に関する知識を教えるのも、もちろんその一つだ。その日本語教師という仕事の醍醐味は、世界各国から来る人々と出会えること、新聞などで目にする他国の「遠いこと」が近くのこととして感じられること、自分自身の視野を広げられること、留学生の「わかった！」の笑顔が見られることなどいろいろある。だが、何と言っても最大の魅力は、日本に住む平凡な日本人の私には、あまりにも近すぎて、見えなかったり忘れてしまっていたりする日本の一面に留学生が気づかせてくれる点にある。

最近、毎日のようにメディアで取り上げられている「鬼滅の刃」も、「ワンピース」も「初音ミク」も「ラブライブ！」も「ポムポムプリン」も「水樹奈々」も私は留学生から教えてもらった。また、秋元康の発表についても然りだ。いつの間にか私の中で「発表とはこうあるべき」という凝り固まった型ができてしまっていたようで反省させられた。

有形無形の形で様々なものを私に与え続けてくれている彼らに、私はきちんと向かい合えているのだろうかと時に不安になる。そんな時には「川の流れのように　おだやかに　この身をまかせて」を思い出し、焦らずいこうと自分に言い聞かせている。今後、いったいどんな出会いが私を待っているのだろうか。あの時、私の人生を大きく変えてくれたあのアメリカ人学生に再会できる日も、もしかしたらいつか来るのかもしれない。その時は、まず『は』と『が』の違いの話から始めようと思う。どんな仕事でも楽しいことばかりではない。でも、「いつかは　また晴れる日が来るから」と信じ、ワクワク胸を躍らせながら待っていたい。

最後に一言。

このエッセイについてのいかなる苦言や批判もカンジュいたします。